

砂場におけるままごと遊びの発達の検討

箕輪潤子*

Developmental Study of Young Children's Social Play in Sand Box

Junko MINOWA

要 旨

本研究では、3歳児から5歳児までの砂場におけるままごと遊びについて、ガーヴェイがごっこ遊びに見られると述べた「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」という枠組みを用い、発達の検討を行った。その結果、年齢があがるに従って、子どものもつイメージがより具体的になり、砂に対する動きや遊びの展開が砂というものの性質に添って行われる段階から、イメージを砂によって具現化していく段階へと変化していくことが明らかになった。

キーワード：砂遊び、幼児（3歳児～5歳児）、共同遊び、発達

問題

保育園や幼稚園においては、子どもが砂場で遊ぶ様子を日々見ることができる。子どもが砂場を好む理由のひとつとして、可変性や可塑性といった性質をもつ砂が多様な遊びを可能にすること（笠間、1999、2001、2007）を挙げることができるだろう。箕輪（2006）は、砂遊びが「プラン」の違いによって「構成遊び」「ごっこ遊び」「プランのない遊び」の3つに分けられることを指摘している。そして、「構成遊び」のうち、「積む」行為が中心となる「山作り遊び」、「掘る」行為が中心となる「穴彫り遊び」それぞれにおいて、3歳児、4歳児、5歳児では行為の種類や役割分担の仕方、遊びの展開などが異なっており、年齢が上がるにつれて複雑化していくことを指摘している。その一方で、「山作り遊び」と「穴彫り遊び」とでは、行為の内容

*講師 保育学・幼児教育学

に違いがあることや、行為のバリエーションが増加する年齢が異なっていることについても明らかにしている。しかし、「砂や場、他児との関わりを経験によって、その展開や過程が異なること」は、「山作り遊び」や「穴掘り遊び」といった「構成を伴う遊び」以外の砂遊びにも共通して言えることなのであろうか。そこで、今回は「ままごと遊び」についての発達の検討を行う。

分析方法については、箕輪の幼児同士の砂遊びの分析（箕輪，2006）、山作り遊びの分析（箕輪，2007）、穴掘り遊びの分析（箕輪，2008）と同様に、ガーヴェイがごっこ遊びのやりとりの内容に含まれると述べた「プラン：動きや話の筋書きを決める動作系列のレパートリーで、日常生活の経験に基づく」「役割：日常生活において出会った人の一般的な動きをもとに、自分とは異なる人物を演じること」「物（の見立て）：プランや役割に沿って、モノを別のモノに見立てて扱うこと」「状況設定：実際の状況とは異なる架空の状況を作り出すこと」の概念を援用する。箕輪（2005）は、砂遊びには、砂との関わり方や遊びの展開の仕方によって「ごっこの要素を含む遊び」「構成を伴う遊び」「ごっこの要素を含まず、構成を伴わない遊び」の3種類があり、(1) 遊びの種類に関わらず、やりとりの内容には「プラン」と「役割」、もしくはそれらに相当するものが含まれること。やりとりの内容における「物（の見立て）」「状況設定」の有無は、遊びの種類によって異なること (2) 「構成を伴う遊び」「ごっこの要素を含まず、構成を伴わない遊び」では、「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の性質がごっこ遊びのものとは異なること の2点を示すことで、砂遊びとごっこ遊びの特徴が異なることを明らかにしている。本研究においても、ガーヴェイの概念を援用することで、遊び方や砂に関わる行為を分類する研究や、時間経過に伴う行為の変化を分析する研究とは異なり、砂遊びにおける基本的な枠組みの性質を年齢ごとに検討することで、年齢ごとの砂遊びの特徴を明らかにできると考えられる。また、ガーヴェイの概念が砂遊びの分析に援用可能であることを示すことで、ごっこ遊び、砂遊びなど、遊びの種類を超えて共通にある遊びの枠組みを見いだすことができると考えられる。そして、保育者に対しては、幼児の発達に応じて援助を行うための示唆を提供できると考えられる。但し、箕輪（2006，2007）は、山作り遊びが「構成を伴う遊び」であり、「構成を伴う遊び」における「プラン」「役割」「物（の見たて）」「状況設定」の性質は、ガーヴェイがごっこ遊びにおいて見られると指摘したそれらの性質とは異なることを指摘している。そこで、本研究ではガーヴェイの概念を援用して事例を分析するが、「プラン」「役割」「物（の見たて）」「状況設定」の性質は、箕輪（2006，2007）の定義に従うこととする。その理由は、砂遊びに関する先行研究には幼児同士のやりとりに含まれる内容に注目する視点が欠けていること（箕輪，2006）と、「穴を掘る遊び」の発達の検討に留まらず、「山作

り遊び」との共通点や差異について検討することで、砂遊びという特定の遊びの発達を明らかにするための示唆を得るためである。

方法

1. 研究協力者・観察期間・観察方法

2005年4月～7月の4ヶ月間、都内国立大学付属T幼稚園の砂場にて、自由遊び時間に3歳児(23名)、4歳児(54名)、5歳児(56名)が、各年齢に分かれて設置されている砂場(注2)で砂遊びをする様子を、ビデオで記録し同時にメモを取った。観察日数は10日間(1回につき1時間～2.5時間)で合計19時間である。子どもの人数は在園児の人数であり、本文中の名前は全て仮名である。

今日の観察では、T幼稚園の5歳児がままごと遊びをする様子は見られなかった。そこで、保育所での観察記録から、ままごと遊びの場面を分析対象とした。保育所における観察期間等は次の通りである。

2003年4月～6月の3ヶ月間、東京都内にある私立A保育園の砂場にて、自由遊び時間に3歳児(11名)、4歳児(14名)、5歳児(23名)が砂遊びする様子を参与観察した(合計15回、22.5時間)。記録は観察終了直後にメモをとり、その日のうちにフィールドノートにした。

<分析方法>

観察したビデオとメモから幼児の言動を記録に起こし、ままごと遊びをする様子が含まれる場面を年齢ごとに選択した。ままごと遊びであるかどうかは、幼児が食べものについての見立てをしていたり、皿やカップなどの食器(道具)を使用しているかで判断した。更に選択した場面から筆者が各年齢について特徴を導き出し、最も典型的にその特徴がよく見られたと判断した場面を事例とする。分析は、各年齢の事例について、穴掘りの展開過程を整理した上で、幼児同士のやりとりの内容に含まれる「プラン」「役割」「物(の見立て)」「状況設定」の性質について検討し、各年齢の山作り遊びの特徴を考察する。

結果

1. 3歳児

(1) プラン：あり（一部不明）

この遊びのなかには「あめとたまごにしよう」「カステラですよ」「ケーキつくる！」「ごはんできたよ」といった見立てに関する言葉がでてきている。ガーヴェイはごっこ遊びにおいて見立てがプランと結びつくことがあると述べていることから、見立てがごっこ遊びのプランに結びついているかを、子どもの砂に対する動きから検討する。さらに、「いっしょにさ、こうえんいったよね」～「またこうえんいこうね」といったストーリーのある会話がでてきている。この会話がごっこ遊びのプランと関連しているかについても、子どもの砂に対する動きから検討する。

まず、かおりの「あめとたまごにしよう」という言葉 (③) については、“小さな丸が6つできる型”から見立てが生じていると考えられる。かおりの見立てをゆきも同意しており、かおりは「あめ」と「たまご」が具体的にどのようなものなのかについて詳しく説明をしている (④)。しかし、見立てをした後の子どもたちの動きをみると、型に砂をつめて捨てるということを繰り返しており (⑤)、あめとたまごを扱うようなふりをしているわけではない。つまり、動きからは「あめとたまごを作る」というプランがあるかはわからない。ただし、子どもたちは「あめ」と「たまご」を作っているつもりになっている可能性もあり、その場合は「あめとたまごを作る」というプランが遊びのなかにあったと言える。そして、「カステラね (⑧)」「ごはんできたよ (⑩)」という言葉についても、容器に砂をつめる前から「カステラをつくろう」「ごはんをつくろう」と思っていたとすれば、「カステラ作り」「ごはん作り」といったプランが遊びのなかにあったと言える。しかし、砂を型につめてから「ごはん」や「カステラ」に見立てたとすれば、「ごはん作り」や「カステラ作り」といったごっこ遊びのプランはないことになる。このように「あめとたまご」「カステラ」「ごはん」については、見立てを宣言した前後の子どもたちの砂に対する動きが、プランと結びついたものであったかはわからない。

次に、「いっしょにさ、こうえんいったよね」～「またこうえんにいこうね (⑥)」という会話について述べる。この会話については、過去の出来事について思い出しているだけであると考えられ、ごっこ遊びとしてのストーリーではないと考えられる。ただし、過去に公園に行ったことを思い出しているうちに、カップをもってきて“お弁当”を作ろうとした可能性はある。その場合は「お弁当を作る」というプランがあったと考えられる。

最後に、ゆきの「ケーキつくる！ (⑩)」という言葉についてである。この言葉の後、保育

者がカップに入った砂をひっくりかえしたり、かおりがケーキにかざるための葉っぱをもってきたり、ゆきも砂をカップにつめたりしている。つまり、「ケーキ作り」のプランが成立していると考えられる。

これらのことから次のことが言えると考えられる。第一に、砂を型につめたり容器に入れたりといった遊びは、たとえ見立てと結びついていたとしても、必ずしも“ごっこ遊びとしてのプラン”に基づいているとは言えない。なぜなら、砂遊びにおける見立ては何かを構成してから起きる場合があり、その場合は何を作るという目的がないため「〇〇作り」といったごっこ遊びのプランは存在しないからである。また、見立てが先に起きた場合つまり見立てに沿って何かを作る場合でも、子どもの動きは砂に関わる動き（砂をすくう、入れる等）をするため、見立てを支える言葉・会話や他児の動きなどがない限り見立てが持続しにくく、それに伴ってプランも消失しやすいと考えられるからである。第二に、「〇〇作り」といったごっこのプランのあるなしにかかわらず、“砂をすくう”“(容器などに)砂を入れる”といった一連の動作があることから、何らかの形を形成する「容器に砂を入れることで形を作る」というプランは、ごっこの要素をもつ砂遊び（砂を用いたまご遊び）に存在していると考えられる。

なお、かおりとゆきとの間には、あまり会話はかわされていないものの、隣に座り続けており、砂を入れる容器や砂をすくうための道具の選択、砂の扱い方において、お互いの影響を受けている。また、砂に関わっているときには自分の目の前の容器や砂に集中しているため、見立てのイメージがどの程度共有されているかは明確ではないが、他児の見立ての宣言に対して同意をしている。箕輪（2007）は、3歳児の山作り遊びにおいて、子ども同士がお互いの行為を見合ったりや、真似をしたりすることに支えられていると述べているが、3歳児のごっこの要素をもつ砂遊びにおいても、お互いの行為を見合ったり、真似をしたりすることによって支えられていると考えられる。それぞれの子どもを見てみると、かおりの方がゆきに対して積極的に働きかけており、ゆきのかおりが何かを言うと同意をするといったパターンが多い。

そして、砂を入れる道具の使用については、ゆきは手、しゃもじ、スプーンなのに対して、かおりはスプーン、しゃもじ、シャベルとなっている。それぞれ容器との組み合わせは決まっていないことから、特に道具の選択に理由はないと考えられる。

(2) 役割 あり

この事例において、かおりとゆきは誰かのふりをしているような言動をしておらず、何らかの役を引き受けているとはいえない。つまり、ごっこの役割はないといえる。また、砂に関わる動きの上でも、かおりとゆきはお互いの動きや言葉に影響を受けているものの、何かを作る上で作業を分担するといった役割分担は「ケーキ作る！（⑩）」とゆきが宣言するまでは特

に見られない。ただし、ゆきが「ケーキ作る！」と言ったあと、かおりが飾りに使う葉っぱを取りに行っており、ケーキを作る上で役割の分担が起きている。ただし、本人たちがそれを意識的に行っているかはわからない。

(3) 物の見立て：あり

プランの部分でも述べたように、この遊びのなかには子どもたちが見立てをしていることを示す言葉や会話がいくつか出てきている。まずかおりの「あめとたまごにしよう (③)」という言葉については、“小さな丸が6つできる型”から生じたと考えられ、これから作ろうとしているものを「あめ」「たまご」として見立てることについての宣言だと言える。ただし、型に砂をつめ、捨てるという操作は、作ったものは本物の「あめ」や「たまご」を扱うように扱うものではなく、砂としての扱いをしている。次に、「カステラね (⑧)」「ごはんできたよ (⑫)」という言葉からは、砂を容器に入れたものをカステラやごはんに見立てていることがわかる。一方で、「ケーキつくる！ (⑩)」というゆきの言葉は、これから砂で作るものがケーキであることの宣言であると言える。

箕輪(2006)は、砂遊びにおける見立てについて、砂の状態から生起する見立てとプランやテーマに沿った見立てがあると述べている。今回の3歳児のままごと事例においても、砂で形ができてから行う見立てと、見立てを行ってから砂で形を作り始める様子がみられる。

(4) 状況設定：不明

様々な見立ては行っているものの、それらに関連する架空の状況が場に設定されているかは、子どもの言葉や動きから確認することはできない。

但し、この遊びが始まってから終わるまでの間、ゆきはずっと同じ場所(砂場の枠)に座り続けていた。また、かおりは何度か道具を取りにいったり保育者に作ったものを見せに行ったりするなど、何度かその場を離れることがあったが、必ずゆきの左隣に戻ってきていた。山作りや穴掘りのように構成の対象は遊びの拠点になりうるが(箕輪, 2006)、ごっこ遊びにおいては砂を入れた容器をもって移動することも可能である。しかし、この事例において子どもたちはずっと同じ場所で遊んでおり、砂場の枠に座っている。

以上のことから3歳児の砂場でのままごと遊びの特徴として、容器に砂を入れることが主となっているが、意図的な道具の選択は行われていないこと、役割の分担は明確でないもののお互いがしていることは常に意識していることを挙げるができる。

2. 4 歳児

(1) プラン あり

最初に、子どもたちの動きや言葉からプランがあるか、あるとすればどのようなプランがあるかを検討する。

まず、きょうへいについて述べる。砂に関わる動きは、“スプーンでお椀に砂を入れる”“お椀に入れた砂を固める”などである。また、砂を入れたお椀にスプーンを添えたり、お椀を保育者の前に並べて食べてもらうなどしている(⑫)。これらのきょうへいの動きからは、遊びの開始から一貫して「料理をする」というプランがあることがわかる。そして、保育者に作ったものを説明する際に、砂をお椀に入れたものを“ラーメン”“お茶漬け”などに見立てている(⑬)が、見立てがどの時点で行われたのかはわからないため、「料理をする」プランが「ラーメンを作る」といった具体的なプランであったかは不明である。

次に、あきらについて述べる。せいいちが「めしもってきてー」というまでの、あきらの砂に関わる動きは、“鍋やフライパンに砂を入れる”“鍋やフライパンをふる”“鍋やフライパンの中の砂をまぜる”“フライパンからお椀に砂をうつす”“鍋のなかの砂をつぶす”などである。これらの動きからは、遊びの開始から一貫して「料理をする」プランがあることがわかる。そして、あきは砂場に入ってきたきょうへいに「ごはんつくってる」「たきこみごはんつくってるんだ」と伝えている(④)。このことから、「料理をする」というプランが、具体的に「ごはん作り」「たきこみごはん作り」といったプランであることがわかる。ただし、砂場に入ってきた時点では何をしているのかについての言及はなく、また見立てを行ったあとにも何を作っているのかということについての言及はない。その点では、「料理をする」というプランが、どの時点からどの時点まで「たきこみごはん作り」という具体的なレベルでのプランであったかはわからない。

きょうへいもあきらも料理をするふりをしていることから、2人は「料理作り」というプランでの遊びを展開していることがわかる。しかし、きょうへいとあきは、同じ時に同じような動きをしているわけではないし、1つのものを一緒に作っているわけでもなければ、作業を分担しているわけでもない。つまり、プランを共有して一緒に遊んでいるわけではなく、それぞれに「料理作り」を行っているのである。但し、あきは、きょうへいがお椀に砂を入れているのを見て「おれもごはん作っているんだ(④)」と話しかけたり、きょうへいの方を何度も見て気にしている。また、きょうへいについてはせいいちがしていることに関心をもっており、自分と同じことをしていることを意識している(⑩)。

なお、きょうへいとあきらの動きをみると、地面から砂を“すくう”，すくった砂を容

器に“入れる”という動きを繰り返していた3歳児と比べて、“かきまぜる”“なでる(ならず)”“ふる”“叩く(固める)”など砂に対する行為の種類が増えている。また、3歳児は、砂を入れる容器が“型(6つの丸型, ケーキ型の2種類)”“カップ”, 砂をすくうための道具が“スプーン”“しゃもじ”だけであった。それに対し、きょうへいの場合は容器が“フライパン”“お椀(3つ)”“皿(四角, 丸形)”すくうための道具が“スプーン”“しゃもじ”, あきらの場合は容器が“鍋(2つ)”“フライパン”“お椀(2つ)”すくうための道具が“スプーン”“しゃもじ”と使用する道具の種類も数も増えている。

(2) 役割 あり

まず、きょうへい、あきらともに、料理をするふりをしている。しかし、言葉や動きからは、料理をするふりをする際に自分以外の人物を演じているかを読み取ることはできない。なお、2人は同じプランで遊びながらも、プランを共有しているわけではないため、役割分担も行われていない。次に、あきらとせいいちについては、せいいちに「めしもってきて」と言われたことであきは料理を作って運ぶ役割を引き受けている。ただし、自分以外の人物を演じているかは言葉や動きからはわからない。

(3) 物(見立て)あり

きょうへいは、砂を入れたお椀を保育者の前に並べて、「こっちはラーメンです。こっちはお茶漬けです(16)」と言っており、“ラーメン”“お茶漬け”に見立てていることがわかる。但し、先にも述べたように、最初から“ラーメン”“お茶漬け”を作ろうと思っていたのか、お椀に砂を入れたことでお椀に入っている食べ物を思いついたのかについてはわからない。あきらについても、「ごはん作っている」「たきこみごはんつくっているんだ」と言っており(5)見立てを行っていることがわかだが、それがどの時点からどの時点までの見立てなのかは不明である。なお、見立ての内容は、3歳児が“ケーキ”“ごはん”などであったのに対し、4歳児の見立てはより具体的なものになっている。

(4) 状況設定：不明

様々な見立ては行っているものの、それらに関連する架空の状況が場に設定されているかは、子どもの言葉や動きから確認することはできない。但し、きょうへいやあきは、それぞれ使っている道具を置いてある場所を拠点にして遊んでいることがわかる。

以上のことから4歳児の砂場におけるままと遊びの特徴として、遊びがいくつかのプランで構成されてストーリーになっていること、各プランにおいて行為にいくつかのバリエーションがあると共に道具の選択をしていること、他児がしていることを意識しながらも自分のイ

砂場におけるまご遊びの発達の検討

表1 「3歳児のまごとの事例」

事例	事例の解釈
<p>ゆきは皿をもって砂場の枠に座り、皿をひざのうえに置く。かおりもカゴにいくつかの道具を入れてもってきて、ゆきの隣に座る(①)。かおりが、スプーンで型(小さな丸い形が6つできる)に砂をつめながら「きれいにいれない」と言うと、ゆきもかおりがもってきたかごから同じ形の型をとり、左手で砂をつめる(②)。かおりは手をとめて、ゆきが砂をつめているのを見なが「あめとたまごにしよう」と言う(③)と、ゆきは指で砂を型から出しながらうなづいた。かおりは手をとめたまま「たまごでさあ、なかにさあ、なんかはいってんだよね」とゆきに言うと、ゆきはしゃもじで砂をすくって型に入れながらうなづいた。(④)</p>	<p>①かおりはゆきと一緒に遊ぼうとしていると考えられる。 ②ゆきはかおりと同じことをしようとしている。ただし、砂を入れる道具は使っていない。 ③ゆきが自分と同じことをしているのを見たことで、見立ても一緒に共有しようとしている。なお、この見立ては型の形から生じたと考えられる。 ④ゆきは、かおりの提案に同意している。ただし、かおりが言っているように、何かを砂の入れるということはしていない。イメージだけは共有しているのか、かおりの言っていることの意味をゆきがよくわかっていないのかは不明である。</p>
<p>ゆきはしゃもじで砂をすくって型につめ、手でなでるのを繰り返している。その横でゆきはスプーンで砂をすくって型につめて、つめると砂をすてるのを繰り返している。(⑤) かおりが「いっしょにさ、こうえんにいったときあるよね」とゆきに話しかけた。ゆきは「うん、あるねえ」と言う。かおりは「おーっと、おーっとってなったんだよねえ」と言うと、ゆきが「またいこうね、こうえん」という。(⑥)すると、かおりはカップをもってきて「おべんと、もっていこうね」と言う。(⑦)</p>	<p>⑤二人は同じことを何度も繰り返している。 ⑥この公園についての会話は、2人がしていることから生じたものではないようである。 ⑦公園に行くことについての会話から、お弁当を作ることを思いついてカップをもってきた可能性はあるが、次の場面で保育者がきたときには、カップに入れた砂はカステラに見立てられている。カップをもってきた時点では“お弁当”を作ろうとしていたのか最初からカップとお弁当は関係がないのかはわからない。</p>
<p>(保育者が砂場にやってきた。おさむたちと山を作り始める) かおりとゆきは砂をカップに入れている。かおりはカップにつめた砂を先生に「はいせんせい、これカステラね」と渡す(⑧)。ゆきはカップをおき、手で砂を型につめているが、山のほうが気になっているようだ(⑨)。(中略)</p>	<p>⑧保育者が来たことで、見立てをしていることから、保育者を意識していることがわかる。 ⑨保育者に対して話しかけたりしているわけではないが、ゆきもまた保育者、もしくは保育者がしていることを意識している。</p>
<p>ゆきはしゃもじでカップに砂をつめ、つめると砂をすてる。かおりは近くにあったシャベルでカップに砂をつめる。ゆきはカップに砂をつめながら「ケーキつくる!」という(⑩)と、かおりは立ち上がって砂場の横にある樹のところにいき、樹から葉っぱを一枚とってきてゆきにわたした(⑪)。(保育者がきて、ゆきもっていた砂の入ったカップをお皿に裏返すと、砂が型からはずれて形ができる)保育者が「ケーキができました」というと、かおりも砂の入った自分のカップをみせて「ごはんできたよ」と保育者に言う。(⑫) ゆきは、保育者から砂ののった皿を受け取ると、砂の上に葉っぱをパラパラとのせた(⑬)。そして、ゆきはお皿から砂を落とすと、カップに砂をつめてお皿にひっくり返す(⑭)</p>	<p>⑩ここまではゆきが見立てをすることはなかったが、ここで初めてゆきが見立てをしている。 ⑪ゆきが見立てをし、つくと宣言したことで、かおりはその見立てを共有しゆきに対して協力しようとしている。 ⑫⑦と同様に、保育者を意識して見立てを行ったと考えられる。 ⑬かおりが持ってきた葉っぱを飾りに使っていることから、かおりが何故葉っぱを持ってきたかを理解していることがわかる。 ⑭ここまでは砂を容器に入れることを繰り返していたが、保育者がケーキの形を作って見せたことによって、それを真似しようとしていることがわかる。</p>

表2 「4歳児のままごとの事例」

事例	事例の解釈
<p>あきらは、スプーンと鍋を2つもって砂場に入ってきた。砂場に落ちていたお玉で砂をすくって鍋に入れていく。(①)砂が固いと崩してから砂をすくう。あきらはしゃもじをとってくると(②)、砂をすくって鍋の中に入れてたり、鍋の中の砂を叩いたり、つぶしたり、まぜたりしている。そして、カップをもってきて傾けて砂を入れ、ふる(③)。</p> <p>フライパンをもってきょうへいが砂場に入ってくる。あきらから1.5mほど離れたところにしゃもじと、砂場におちていたしゃもじで、砂をすくいフライパンに入れる(④)。あきらは「おれもごはんつくってるんだ」「たきこみごはんなんだ」ときょうへいに話しかける(⑤)が、きょうへいは無言でカップをふって中の砂を鍋にうつす(⑥)。そして、砂の入った鍋から砂の入っていない鍋に砂をすくっては入れていく。きょうへいは砂場のそばの道具入れのところにいつて、何かをさがしている。あきらはきょうへいに「なにかあるでしょ」というが、きょうへいは無言のままである(⑦)。</p> <p>きょうへいはもってきたスプーンでお碗や茶碗に砂を入れる(⑧)。そして、砂場のすぐ隣にあるログハウスのところについて、ログハウスのなかにいるせいいちがしていることを見る(⑨)。せいいちがきょうへいに「ごはんつくってる」というと、きょうへいは「おれも」と言い、もとの場所に戻って、スプーンで皿に砂を入れる(⑩)。せいいちがカップに砂を入れて砂場にきた先生に渡す(⑪)。あきらは道具箱から皿やしゃもじなどをとってくると、スプーンでカップに砂を入れ、先生にわたす。(⑫) ログハウスからせいいちが「せんせーい。できましたよー。はやくこないと終わっちゃいますよー」という(⑬)。</p> <p>保育者がせいいちのところへいつている間に、あきらは砂を入れた青い茶碗をきょうへいのところにもっていく。(⑭) きょうへいは無言で砂をカップなどに入れているが、あきらはきょうへいのまえに砂の入ったお皿を置く。きょうへいはあきらが置いた茶碗を3つ砂場の枠に並べる。(⑮) きょうへいは道具箱からスプーンをもってきて、茶碗に1つずつ指す。そして、先生に「これはラーメン、これがお茶漬け」と言う。きょうへいは先生にごちそうするためのごはんをいくつも作り、いろいろな色のシャベルと一緒に並べ、保育者に「食べて」という(⑯)。</p>	<p>①すぐに盛りつけの皿に入れるのではなく、“料理をする”という過程を行っている。</p> <p>②お玉よりも砂を崩しやすい道具を選んできたと考えられる。</p> <p>③“料理をする”ことにおいて、砂に対して様々な行為を行っている。</p> <p>④あきらと同様に、“料理をする”過程を行っている。この行為があきらの影響を受けたものかはわからない。</p> <p>⑤あきらはきょうへいが自分と同じようなことをしていると思い、話しかけたと考えられる。</p> <p>⑥きょうへいにとってあきらが自分と同じことをしているかどうかには関心がないのかもしれない。なお、カップをふるという行為からも、“料理をする”過程を行っていることがわかる。</p> <p>⑦あきらはきょうへいがしていることに対して関心をもっていることがわかる。しかし、きょうへいはあきらと関わろうとはしていない。</p> <p>⑧きょうへいの動きからは“料理をする”過程から“盛りつける”過程へと変わっていることがわかる。</p> <p>⑨きょうへいはせいいちがしていることには関心をもっていることがわかる。</p> <p>⑩せいいちについては、同じようなことをしていることを認めている。</p> <p>⑪保育者に対して“食べてもらう”ことを求めている。</p> <p>⑫保育者が来たことで、もしくはきょうへいが保育者にカップを渡したことで、自分も保育者に対して“食べてもらう”ことを意識している。</p> <p>⑬あきらときょうへいが、保育者に作ったものを渡しているのを見たことで、自分も作ったものを食べてもらおうとしている。</p> <p>⑭あきらはきょうへいと関わろうとはしていない。</p> <p>⑮きょうへいは直接的にはあきらと関わろうとはしていないが、あきらがくれたものは受け取っていることから、あきらの意図は理解していると考えられる。</p> <p>⑯きょうへいは、保育者に食べてもらうことをかなり意識していることがわかる。</p>

砂場におけるままごと遊びの発達の検討

表3 「5歳児のままごとの事例」

事例	事例の解釈
<p>まいはお皿の上のふるいに湿った黒い砂を入れ(①)、シャベルで砂を潰すようにして、細かい砂と小石に分けている(②)。まいが「ケーキつくってるの」と言うと、いよも「ケーキつくってるんだよね、まい」とまいに言う。まいは「うん。チョコレートケーキ作ってるんだよね」と答える(③)。いよはまいがさらさらにした砂をスプーンでお皿に薄くひき、さらにその上に少しずつ砂をひいて層のように重ねていっている(④)。まいは砂をさらさらなものと同様に分けて続けている。(⑤)</p> <p>いよが細かいくろすなでできたチョコレートケーキの上に、小さな葉を飾る。いよが「チョコレート、なめらかにしたから、とろーんとしてるよ」と首をすくめてうれしそうに言う。まいも「とろーんなめらかなの。お口も溶けちゃうよ。」とにこにこしている(⑥)。</p>	<p>①湿って黒くなっている砂を選んで使っている。</p> <p>②砂をチョコレートに見立てており、チョコレートをこすように砂をこしている。</p> <p>③ケーキのなかでも具体的にチョコレートケーキというイメージがある。</p> <p>④⑤いよとまいは作業を分担していることがわかる。</p> <p>⑥</p>

表4 〈プラン・役割・物(の見立て)・状況設定の性質〉

		3歳児	4歳児	5歳児
プラン	一連の動きからなる動作。	○	○	○
役割	他の人物を演じる役。もしくは、1つのモノや複数のモノを作るために、必要な行為を分担した上で引き受けること。「作業を行う者としての役割」と呼ぶ。	○	○	○
物(の見立て)	構成したモノ、もしくは構成しようとしているモノに対し、他のモノの名前を命名し、意味を付与すること。変化した砂の状態に類似したモノを思いつくことで行う見立てと、構成の最終的な目標として行う見立てがある。本研究では、見立てが行われているかは、言葉によって命名されているかによって判断する。	○	○	○
状況設定	砂の変化によって誘引された見立てが、そのまま状況として設定されること(例:穴を「海」に見立てることで、その場一帯を「海」としてふるまう)。	不明	不明	不明

メージを遊びのなかに反映しようとする意図が強いことを挙げることができる。

3. 5歳児

(1) プラン あり

「ケーキつくってるの」というまいの言葉と、そのまいの言葉をききたいよの「ケーキつくってるんだよね。まい。」という言葉からは(③)、2人が「ケーキ作り」のプランを共有してい

ることがわかる。さらに、まいが砂を細かいものと小石に分けていること(②⑤)と、いよがまいが分けた細かい砂を重ねてケーキの形にしていること(④)からは、「ケーキ作り」のプランにおいて、そのプロセスとして「(材料である)チョコレートをなめらかにする」プランと、「(材料の)チョコレートを重ねてケーキにする」プランがあることがわかる。これらのプランはごっこの要素をもつプランである。

砂との関わりをみると、まいは「砂をふるう(こす)」動きを、いよは「砂をのせる(薄くひく)動きをしている。これらの動きは、ケーキの材料としての砂をチョコレートに見立てて、チョコレートをなめらかにするふりと、なめらかにしたチョコレートとしての砂を層に重ねていくふりである。つまり、形を作ってケーキに見立てるだけでなく、ケーキを作る過程も遊びのなかで表現していることがわかる。

(2) 役割 あり

いよとまいの言葉や動きからは、自分以外の人物のふりをしているわけではないと考えられる。つまり、それぞれがなんらかの役を演じているわけではない。しかし、ケーキを作る段階では、まいがふるいを使って砂を細かいものと小石に分け、いよがまいが分けた砂を皿にひいており、役割分担をしていることがわかる。2人が「チョコレートケーキ作り」のプランを共有すると共に、作業を分担して1つのケーキを創りあげている。

(3) 物(の見立て) あり

「ケーキつくってるの」「けーきつくってるんだよね、まい」(③)という言葉からは、二人がこれからつくろうとしているものをケーキに見立てることを示していると同時に、そのことを2人が共有していることがわかる。そして、「チョコレートなめらかーにしたの(⑥)」という言葉からは、単に作ったものを「ケーキ」に見立てるだけでなく、ケーキの材料として砂をチョコレートに見立てていることもわかる。

(4) 状況設定 不明

様々な見立ては行っているものの、それらに関連する架空の状況が場に設定されているかは、子どもの言葉や動きから確認することはできない。但し、この遊びが始まってから終わるまでの間、2人は同じ場所で遊んでいた。これらのことから、2人がある場所を遊びの拠点としていることがわかる。

以上のことから、5歳児の砂場でのままと遊びの特徴として、遊びがいくつかのプランで構成されてストーリーになっていること、各プランにおける行為はそのプランに関する具体的なイメージに基づいていると共に、イメージに沿った道具の選択をしていること、他児と役割

分担を行い1つのものを作っていくことを挙げることができる。

総合的考察

本研究では、幼稚園の砂場におけるままごと遊びを観察し、ガーヴェイの「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の概念を援用し分析を行い、年齢ごとの砂場におけるままごと遊びの特徴を明らかにした。その結果を踏まえ、それぞれの年齢ごとの砂場におけるままごと遊びの特徴を、環境（物・空間）との関わりと、人との関わりという観点から考察する。

第一に、環境（物・空間）との関わりについて考察する。

3歳児は、砂を手や道具で“すくい”，すくった砂を容器に“入れる”，入れたものは“すてる（出す）”という行為の繰り返しを行っていた。容器に砂を入れることによってそれを食べ物に見立てる姿も見られるが、見立ての内容は“食べ物”というカテゴリーには一貫性があるものの、どのような食べ物なのかという細かいイメージはなく、見立て自体も容器の種類や他者の言葉によって刻々と変化している。つまり、見立てや容器によって砂というモノとの関わり方を変えたり、遊びのなかで一貫した見立てを行ったりということはないのである。これらのことから、3歳児の砂場でままごと遊びにおいては、砂というモノに関わることで自分が中心となっていることがわかる。砂というものが“すくう”ことや“入れる”ことができることや、容器によって形を変えることなど、可変性をもった素材であることを、経験として学んでいると考えられる。

4歳児は、一連の遊びのなかに“料理をする”“盛り付ける（容器に砂を入れる）”“食べてもらう”といういくつかのプロセスがみられた。3歳児は、容器の中に砂を入れることの繰り返しを繰り返すことで遊びの流れができていたのに対し、4歳児は一連の遊びが一つのストーリーとして展開していたのである。そして、“料理をする”プロセスにおいては、鍋に入れた砂をふったり容器に入れた砂をかきまぜるなど、“料理をする”イメージが砂に対する関わりの中に反映されていた。言い換えると、子どもは自分のなかにあるイメージに沿って、砂との関わり方を変えているのである。また、“料理をする”際や“盛り付ける”際に使う容器はいくつかの種類のを複数用いていた。ただし、見立ての内容によって砂の扱い方を変えるということはないことから、“料理をする”過程において具体的な食べ物のイメージを一貫してもっているかということ、必ずしもそうとは言えない。これらのことから、4歳児の砂場でままごと遊びにおいては、子どもがイメージとしてもっているストーリーに基づいた一連の流れに添う形で砂と関わっていることがわかる。

5歳児も、一連の遊びが一つのストーリーとして展開し、“料理をする”イメージが砂に対する関わりの中に反映されていた。そして、“料理をする”プロセスにおいて、4歳児には見立ての具体的なイメージがなかったのに対し、5歳児では何に見立てるのかという具体的なイメージが一貫して見られた。そのことで各プロセスのなかで行う砂に対する行為が、見立てに沿った複雑なものとして行われていた。見立てに沿って砂を扱うことができるのは、5歳児が砂の多様な性質を理解しているからだと考えられる。これらのことから、5歳児の砂場でのままごと遊びにおいては、子どもがイメージとしてもっているストーリーに基づいた一連の流れとともに、ストーリーにおける各プロセスにおける具体的なイメージに沿って、砂と関わっていることがわかる。

そして、空間との関わりについては、3歳児、4歳児、5歳児ともに、砂場という枠に囲まれた空間内において常にある場所を中心に遊びを行っていた。関わりの対象となる砂は砂場のどこにでもあり、砂で遊ぶという点から見れば遊ぶ場所を移動することは可能であるにも関わらず、どの年齢の子どもたちも一貫して同じ場所で遊び続けていた。同じ場所で遊び続ける理由として、一緒に遊んでいる他児がいること、同じ場所に居続けることで安定して砂と関わるることができることが考えられる。

第二に、人との関わりについて考察する。

3歳児は、子ども同士が横に並んで、自分の目の前にある砂や道具と関わっていた。それは隣の子どものしていることに関心がないとか、見ていないということではない。隣に座っている子ども同士は、それぞれのペースながら常に同じような動きをしており、使っている道具や容器についても影響を受けあっていた。一人ひとりを見ても、道具や容器を変える頻度はそれぞれ異なっていた。また、道具や容器をよく変える子どもの方が、そうでない子どもの道具や容器の選択に影響を与えていた。

4歳児は、子ども同士の間には距離があり、それぞれに目の前にある砂や道具と関わっている時もあれば、それぞれにしていることを見に行ったり、自分が作ったもの（砂を入れた容器）を渡したりする時もあった。一人ひとりを見ても、それぞれが異なる動きをしているが、他児がしていることや用いている道具を真似することも見られた。ただし、3歳児のように他児がしていることを自分の遊びにすぐに取り込むのではなく、そのときしていることを終えてから自分の遊びに組み込む様子がみられた。それから、保育者とかかわりにおいては、保育者が子どもに働きかけるよりも、自分が作ったものを見てもらったり食べるふりをしてもらったりするなど、子どもから保育者に働きかけることが多かった。

5歳児は、一緒に1つのものを分担して作るという姿がみられた。使用する道具は分担して

砂場におけるままごと遊びの発達の検討

いる作業によって異なっているものの、目標を共有すると共にお互いにとっての自分が担う作業の位置づけを理解しあっているために、お互いが何をしているかを見合いながら行為をすすめていた。

以上のことから、砂場におけるままごと遊びにおいては、年齢が上がるにつれて子どものもつイメージがより具体的になり、砂に対する動きや遊びの展開が砂というものの性質に添って行われる段階から、イメージを砂によって具現化していく段階へと変化していくことが明らかになった。なお、一般的なごっこ遊びでは自分以外の人物を役として演じるのに対し（ガーヴェイ、1977）、砂場でのままごと遊びでは料理などを行っているふりをしていても、必ずしも役を演じるわけではないことも明らかになった。このことは、目の前にある砂と関わりながら、役を演じることが難しいことを示唆している。また、砂場では変化する砂を対象として遊ぶため、何かを「作る（構成する）」ことに重きが置かれる傾向にあるとも考えられる。

これまでに、砂場における山作り遊び、穴掘り遊び、ままごと遊びの発達の検討を行うことで、年齢によって子どもの砂や他者との関わり方が異なることは明らかにしたが、実際に保育者が砂場においてどのような援助を行うかについてはまだ明らかにしていない。今後の課題として、保育者に対してインタビューを行い、年齢によって砂場遊びの援助をどのようにしているかを検討する。

引用文献・参考文献

- 石井光恵、1993。「砂場をめぐる子どもたち」、『発達』、54、pp.58-64。
石井光恵、1990。「幼稚園における砂遊びに関する一考察」、『日本女子大学紀要 家政学部』、37、pp.17-22
小川清実、2002。「砂遊びの構造—出会いの種々相 小川博久編「遊び」の探求—」、『大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか』、pp.139-164。生活ジャーナル。
Garvey, C., 1977, *Play*. Harvard University Press. 高橋たまき訳、1980、「ごっこの構造—子どもの遊びの世界」、『育ちゆく子ども 0才からの心と行動の世界』、6、サイエンス社。
細田直哉、1999。「幼児の「遊び」の生成過程—エコロジカルアプローチ—」、『東京大学教育学研究科総合教育科学専攻教育学コース修士論文』。〈未刊行〉
笠間浩幸、2001、『砂場と子ども』、東洋館出版社。
笠間浩幸、1998。「こどもの遊び環境としての〈砂場〉」、『環境教育研究』、北海道教育大学環境情報センター、1、pp.113-124、
松本信吾、1993。「子どもはなぜ砂遊びに魅きつけられるのか」、『発達』、53、pp.48-57
箕輪潤子、2006。「幼児同士の砂遊びの特徴」、『保育学研究』、44、pp.82-92
箕輪潤子、2007。「砂場における山作り遊びの発達の検討」、『保育学研究』、45、pp.42-53
箕輪潤子、2008。「幼児の穴掘り遊びの発達の検討」、『川村学園女子大学研究紀要』、19(2)、pp.39-54
無藤隆、1996。「幼児同士の遊びの成立過程—砂場遊びの分析—」、『子ども社会研究』、2、pp.3-17